

「普天間飛行場 ①」



あらまし 普天間飛行場の基地内には、戦前の国指定天然記念物である宜野湾並松が鬱蒼と生い茂る街道が走っていました。並松は約三千本を

数え、シンナンマンチまたはシンノーマーチュー・シンノーマーチーとも呼ばれ、当時の宜野湾村民が最も誇りにし、広く県民にも親しまれていました。街道は近世琉球には中頭方東宿・国頭方東宿、近代沖繩には宜野湾街道・普天間街道と名称の変更はあったものの、長くその時々々の主要道路でありました。

植付と普天間参詣 並松は尚貞王の世子尚純の命で、約三百年前に普天間から浦添の後方まで植付させたことを伝えています。また、尚賢王の代の一六四四年に始まったとされる国王や王府の官人層が



戦前の宜野湾並松街道のようす



宜野湾並松街道

普天間飛行場と並松街道の道筋



琉球国王の普天間参詣のようす (模型)

問合せ・文化課
☎893-4430

旧暦の九月に普天満宮へ詣る普天間参詣にも利用されました。

並松と暮らし 並松は当時の人々の暮らしにとっても大切なもので、高い松の木は人々に木陰と憩いの場となり、台風の際は防風林の役目を果たしました。並松の勝手な伐採は禁止されていました。松から落ちるマーチーバー(松の葉とマーチカサー(まつかさ)はタムン(薪)の材料に使われました。また、子供達のかくれんぼや青年達のモウアシビー(毛遊び)の場所としても親しまれ、並松にちなんだ歌も数多くありました。

戦禍での消滅 並松の大半は今次の沖繩戦で消滅し、その一部は普天間や嘉数などの旧街道筋に一九六〇年代まで残っていました。道路拡張工事やマツクイムシの被害等により跡形も無くなりました。

茶 ぐわーゆんたく

99

「人は右、車は左」

34年前の暑い日

1978(昭和53)年7月30日、沖繩で車両の通行を右側から左側へ変更する、通称ナナサンマル(730)と呼ばれる、大規模な交通改革が行われました。

1972(昭和47)年に本土復帰した沖繩は、交通方法の一因一方式を定めた国際条約に基づき、本土同様の交通方法に変更することを余儀なくされたためです。

当時を知らない世代には想像以上の大事業だったようですが、宜野湾市ではどのような様子だったのでしょうか。

交通方法変更関連事業として、市は道路標識176本、防護柵等の整備2,456km、区画線12,451kmや交差点の改良などを行いました。

市内の学校では、児童生徒の特設授業として、普天間署、PTAの指導で実施訓練の予定でしたが、台風8号の影響のため、教室内でプリントやビデオ指導が行われたようです。

県内の公的機関であるバスについては、左ハンドル、右乗降口を逆にする必要があり、バス協会代表が国へ波状陳情(はつじょうてんじやう)を行い、総額で92億円の補助金が補償されました。実際に、新車のバスが1,019台用意され、

内944台が78年5月頃から、宜野湾市宇地泊のキャンプ・ブーン跡に保管されました。このバスは、変更実施日の深夜に那覇バスターミナルに移管され、それに代わり右乗降口のバスが保管されました。



▲新車保管所(キャンプ・ブーン跡) 1978年

また、交通街頭指導として兵庫県や熊本県から200名余りの応援警察官が普天間署に派遣され、まじめな仕事ぶりが高く評価されました。変更後は混乱や事故もありましたが、沖繩の新しい生活の1ページがこの日から始まりました。

『宜野湾市史』への問合せ
文化課 市史編集係(市立博物館内)
☎870-09317

